

〈研究論文〉

茨城県水海道小学校における戦後新教育実践

——「はえのいない町」（1950年）の撮影と社会科授業——

國 分 麻 里

茨城県水海道小学校における戦後新教育実践 ——「はえのいない町」(1950年)の撮影と社会科授業——

國 分 麻 里

はじめに

1945年以後、茨城県においては県教育委員会の積極的な関与を背景に、新教育実践が盛んに行われた。その断片は『茨城県教育史』(上, 1980)『茨城県史料 戦後改革編』(1992)などで知ることができるが、筆者もその一つである筑波第一小学校のカリキュラム構想および成城学園との交流を通じた自学学習の様子を分析したことがある^①。水海道小学校もそのような茨城県の戦後新教育実践学校の一つであった。戦後の茨城県における新教育実践を整理した新井は、水海道小学校を1960年代の茨城県におけるプログラム学習の代表校として紹介している^②。しかし、水海道小学校は1948年4月より茨城県の教育研究実験校に指定され、1950年代も茨城県ではカリキュラムや視聴覚教育において著名な学校であった。その核心は、カリキュラムの中心に自治活動を据え、その周りの内容教科とされた理科や社会科で教材映画を用いた教育実践を展開したことにある。この教材映画に関して、水海道小学校では「はえのいない町」「私達の学校」という児童の自治活動を描いた映画が撮影された。特に「はえのいない町」は社会科教材映画大系シリーズで最高の売り上げ数を誇り、優秀教材映画としてその年の文部大臣賞を受賞している^③。

「はえのいない町」については、当時カメラマンであった藤瀬季彦の回想および村山英世と中村秀之の詳細な論考がある^④。村山は社会科教材映画大系と水海道小学校を中心に展開された視聴覚ライブラリーの展開状況を明らかにし、

中村は「はえのいない町」を映像論の立場より分析している。また、水海道小学校の自治活動については、特別活動論との関連で明らかにした越川求の研究がある^⑤。しかし、上述した社会科教材映画を用いて、水海道小学校ではどのような授業が構想されたかという社会科教育的な側面は明らかにされていない。

そこで本研究は、今まで用いられていなかった学校所蔵の資料を基に、水海道小学校での社会科教材映画の制作過程と背景を明確にし、制作された映画を用いての社会科授業の状況を明らかにする。本稿により、社会科教材映画と授業の関係を明確にするだけでなく、茨城での戦後教育史の一端も明らかにすることができよう。

1. 水海道小学校の戦後新教育実践

近世以後、水海道は鬼怒川水運の要地として栄えてきた。水海道小学校は、1975年に文海、絹水の二つの小学校を合併し水海道小学校と称されたのが始めである。1887年に小学校令が改正され校名が水海道尋常小学校になり、1941年4月には水海道国民学校となった。この間、1913年には茨城県取手駅～下館駅間を結ぶ常総鉄道が開通した。1990年に水海道小学校校長であった前崎博のメモ資料によると、卒業証書番号の記録から明治・大正・昭和の卒業生は総勢16,120人であった^⑥。敗戦後の1947年、新学制により水海道国民学校は水海道町立水海道小学校と改称され、筑波山に近い北条国民学校の校長であった猪瀬嘉造が赴任した。戦前にも訓導として水海道小学校に勤務した経験もある猪瀬は、退職するまでの1964年までの17年間を校長として過ごした。先行研究でも指摘されている

通り、水海道小学校の先駆的な研究はこの猪瀬校長時代にそのほとんどが行われたものである。この猪瀬校長の残した「猪瀬メモ」を他の資料とつぎ合わせてみると、水海道小学校では戦後新教育の1960年頃までに次のことが行なわれたことがわかる⁷⁾。

まず、1948年、水海道小学校は茨城県指導課より茨城県新教育実験学校として2年間指定された。テーマは「カリキュラムの研究」であった。加えて、1949年5月には茨城県教育研究部により常総地区カリキュラム研究の実験学校ともなった。中心校である水海道小学校は当時、中央教育研究所の矢口新や県指導課の指導により地域教育計画の継続的研究に着手し、社会科や特別教育活動でも実績を上げていた。その結果、1949年5月には学校給食優秀校として知事表彰を受け、1950年5月には学校経営優秀校、そして貯蓄優秀校(子供銀行)として知事表彰を受けた。この子供銀行とは次章で説明する児童の自治活動の一つとして、社会科学習指導要領で示された社会機能の「消費」から子供銀行部を立ち上げ、各児童が郵便局で作成した通帳に小遣いをためていく仕組みであった。1951年10月にはこれも自治活動で行っていた新聞部の活動が評価され、児童が発行していた「やまびこ新聞」「あかつき新聞」が読売新聞社主催茨城県小学校新聞コンクールで1位を獲得した。これ以外にも、1947年に音楽教育研究家の石塚響一を招いたことを契機として、毎年のようにNHK茨城のラジオ唱歌コンクールでは入賞常連校となり、1956年には全日本学生器楽合奏コンクール茨城大会で優勝した。

次に、授業では、1953年には小学校社会科単元「地域に則した課題に基づく社会学習の展開」を完成させ、生活教育研究会を3月に開催している。そして同年、水海道教育研究会フィルム・ライブラリーを結成し、1954年には茨城県教育委員会から指定を受け、水海道は水海道市学校教育実験地区となった。この中間報告会が「地域視聴覚センターの運営と視聴覚教材の利用の研究」というテーマで1955年に開催され、1957年には、中央教育研究所主催で教材映画研

究会を開催している。この教材映画を用いた社会科授業を取材した朝日新聞記事では、児童の様子を次のように書いている。「生徒は男女半々、五十八人である。商家の子供が六割、サラリーマン家庭二割、残りが農家といった色分けでゾウリをはいたのとハダシの子供と半々、けっして裕福とは見えなかった」⁸⁾。また、1959年には国立教育研究所と共同研究で「社会科における学力と学習経験に関する調査」を行なっている。

以上のように、1947年に猪瀬校長が着任し、翌年にはカリキュラムの実験学校になったのを皮切りに、水海道小学校は自治活動をコアにおいた教育活動で茨城県の新教育実践学校として名をはせるようになった。教科では主に社会科で教材映画を用いた授業が行われたのである。

2. 学校資料から見た「はえのいない町」の撮影の背景

それでは、どうして水海道で社会科教材映画大系が製作されるようになったのか。これについては、筆者は次の2つの理由があると考えている。1つ目は、社会科教材映画大系の推進に大きくかかわった矢口との関わりである。2つ目は、水海道小学校の自治活動および地域の協力である。以下、この2つの理由を中心に説明する。

(1) 水海道小学校と矢口新との関わり

水海道小学校で社会科の教材映画が2本撮影されるようになったのは、矢口が水海道小学校に関係が深かったということを1つ目の理由として挙げる。水海道小学校の猪瀬と矢口が出会ったのは1949年4月19日のことであった。その経緯であるが、1954年より20年間水海道小学校に勤務した倉持正によると、校長猪瀬とともに若い時に水海道小学校に勤務していた堀越通雄が矢口と知り合いになり、堀越の紹介で猪瀬と矢口は会って「意気投合」し、「矢口こそ求める水先案内人との確信を得、指導を受ける」⁹⁾ことになったという。「猪瀬メモ」の1949年4月19日には、「中央教育研究所員矢口新先生を招き第1回の指導を受ける。これより混迷していた新しい教育全般について熱烈な継続指導を受け昭

和40年ころまで約15年間続く」⁽¹⁰⁾と書かれている。

その後、茨城県新教育実験学校の報告会の行なわれた1950年2月までに実験学校に関する委員会が8回開かれ、この間、矢口から5回の指導を受けた⁽¹¹⁾。「そのころ矢口は、授業を進めるうえで具体的な資料を大事にしなければならない—という考えのもと、ことのほか視聴覚教育を重視していた。そこで猪瀬は、PTAの理解と協力のもと、さっそく映写機を購入した。昭和二十四年十月のことである」という記述が倉持の資料に残っている⁽¹²⁾。こうした実験学校としての成果と課題は、1950年2月に水海道小学校で行われた茨城県新教育実験学校完結発表会「生活教育とカリキュラムの全体構造について」において報告された。このカリキュラムの研究から教材映画の必要性が叫ばれたとされている⁽¹³⁾。社会科教材である「はえのいない町」の撮影が始まったのは1950年6月であり、7月には完成した。撮影開始はこの1950年2月の報告会から4か月後のことであったことがわかる。このように時系列的に見ると、1950年2月に開かれた新教育実験発表会が、水海道小学校のカリキュラムとその中核に位置付く自治活動を知らしめ、映画撮影につながったと言えよう。先行研究でも明らかにしている通り、社会科教材映画大系は1949年に水海道小学校と関係を持った矢口が肝いりで始めた活動であった⁽¹⁴⁾。また実際に、「はえのいない町」の撮影は矢口がロケ地として水海道小学校を紹介したという証言もある⁽¹⁵⁾。当時、水海道小学校の大上福次郎は、水海道小学校で矢口が語った授業と教材映画の関係について次のような言葉を書き記した⁽¹⁶⁾。

矢口先生は「これからの教育は、もっともっと文化的にならねばならぬ。今で映画で変わるように廻りくどい説明で先生が汗を流している非能率的な授業は、映画を利用することによって解決されねばならぬ。教科書の代わりにドンドン教材映画が製作され、使用されるべきである。今文部省後援、各教育映画会社の協力で、教材映画がどんどん製作されている。水海

道でも授業に映画を用いる研究をされたい。」と語られた。

上記の文章からは、教師の講義式の授業は非能率的であり、また教科書に変わるものが教材映画であるという矢口の認識が分かる。また、水海道小学校に教材映画を持ち込んだのも矢口である。矢口は初期に制作された社会科教材映画大系の「新聞のはたらき」と「青果市場」を水海道小学校の教員や児童に見せたようで、「映画の魅力におどろいたようである」⁽¹⁷⁾と大上の記録には残されている。

(2) 学校の自治活動や地域の協力

水海道小学校が選ばれた理由の2つ目は、学校の自治活動や地域の協力が優れていたことである。シナリオ作成は基本的に映画会社の仕事であり、その過程では水海道小学校を想定して書かれたのではない。「はえのいない町」を撮影した岩波映画製作所は、科学者の中谷宇吉郎と日本映画社の吉野馨治、小口禎三が1949年に中谷研究室プロダクションを設立し、これを基に1950年5月に創立された。東宝文化映画部出身のベテランで当時シベリアから復員したばかり村治夫は、この岩波映画製作所の吉野馨治に「はえのいない町」のシナリオ作成と演出を手伝ってほしいと声をかけられた。2人は1950年の5月下旬の蒸し暑い夜を徹して祖師ヶ谷の吉野宅で議論しながらコンテに近いシナリオを作り上げた。社会科教材映画大系審議会では部分訂正を受けたものの、シナリオにOKが出たという⁽¹⁸⁾。この作品に関わらず、教材映画のシナリオについては協力者や映画会社のスタッフでも意見の一致が難しかったようで、少なくとも2～3回、多い時は7～8回の修正が必要な時があったという。こうした状況から、加納龍一は「周知な単元展開に基いた企画と脚本が準備されなくてはならない」ということ、審議会や製作者が「教材映画を通じての教育の改造と云う」「大それた野心をも併せもっている」ためにしばしばスタッフの脚本家や演出家を困らせたことを述べている⁽¹⁹⁾。この「はえのいない町」で初めて脚本作りに参加した羽仁進が「子どもたち

がハエをなくす運動を通じて、だんだんと社会的な広がりをもってゆく過程が、社会科という新しい教科にとっても新鮮で高く評価された。またそのなかに蠅のバイキンなんかを微速度カメラで撮ったカットを挿入するアイデアをとり入れた。これが一種のSF的なショックを感じさせたようだ」と語ったことが伝えられている⁽²⁰⁾。

水海道小学校で注目されたのはカリキュラムの中心をなす自治活動であった。では、どのような自治活動が映画になるか、矢口の語ったという選定基準が大上福次郎の記録に残っている⁽²¹⁾。

これから模範的な学校の状況を映画化して全国の学校に紹介することになっている。今、全国でどこの学校がよいか、映画監督が有名な学校の実態を視察して撮映すべき学校の選定に努力している。映画監督達は、鋭い時代感覚をもった“先生のお膳立で動いているような児童では映画にならぬ”と云っている。蔭で指揮する先生のお膳立で動いている児童では映画にならぬ。奥に児童自身の力で働いている学校でなければ映画にならぬ。(中略) 東京都内外の有名な学校を参観して、学校新聞の活躍ぶりを見て歩いたが、皆先生に使われている子供達ばかりで、子供自身の力でやっている学校がない。一時は多胡氏が“現在の学校で我々の理想を映画化することは不可能だ”とまで云っていたが、横浜の豊岡小学校の新聞部の活動を見て「これなら映画になる」と折紙をつけて撮影と決定した。あの新聞部の子供達はすばらしい。先生が意見を出そうが、私が云おうが、鳥飲にはしない。分るまで討論しなければ承知しない。あの自主性は大したものだ。多胡氏も大喜びで同時録音の撮影を開始している」⁽²²⁾。

以上の選定基準を見ると、教師の意図で動くのではなく、子どもの「自主性」を最も重視しているのが分かる。教材映画「学校新聞」は「学級新聞から学校新聞に発展してゆく児童たちの生活を中心として、新聞の社会機能を理解させようとするもの」で、児童の生活を指導する

作品として期待を持たれていた。横浜市の鶴見豊岡小学校が選ばれた理由として、「特殊の進んだ学習を行っている学校を選ばず、ちょうどその過程を進んでいる」と同記録に記されている。豊岡小学校では「学校の学習活動や父兄との座談会、先生方との研究会を行う」⁽²³⁾などして、シナリオ作成に力を注ぎ、完成すると審議会の審議を経て撮影に入った。子どもの自主性により豊岡小学校の新聞部が撮影されたのである。それでは、水海道小学校での撮影はどのように決まったのか。それは映画会社の演出とカメラマンの訪問から始まった。

7月初旬突然岩波映画製作所演出の村治夫氏、カメラマン吉野馨氏のお二人が参観に参られた。「教材映画『蠅のいない町』を撮影するため学校を選んでゐる。こちらの自治活動の様子や町の衛生についての状況を知りたい」と申された。早速児童の学校委員会や保健部の活動状況を視察された。保健部、町衛生会、学校医等の活動状況を説明した。「町の様子も見たい」と云われるので暑い中を町を一巡した。(中略) 視察後の感想として左の如く云われた。「子供たちが自主的に努力している様子は涙ぐましい程よい。映画になると思う。町の衛生の協力もすばらしい。今までの東京附近五六ヶ所視察したが、映画にはならなかった。帰ってよく相談して決定したら撮影の許可を得たい」⁽²⁴⁾。

この映画会社の二人の話から、次の2点がわかる。1点目は水海道小学校の子どもが「自主的に努力している様子」が評価されたという点である、また、2点目は地域の協力なしには撮影地としては選定されることがなかったという点である。この2つの点については、「はえのいない町」を水海道で撮影することに決定した時に聞いた話にも表れている。「五六ヶ所有名な学校を視察したが、学校がよいと思うと、町の衛生協力状況が思わしくない、町の衛生状況がよいところでは、学校の子供に自主性がない。こちらは両方そろっているのでは是非撮影したい」⁽²⁵⁾ということが書かれている。こうした話に水海

道小学校の職員児童も喜んだ。努力を認められたからであったという。この後、寺門町長、武藤町教育民生委員長、衛生協会长、校医、県教育委員長、PTA 会長、保健所長、その他関係者と協議し、賛意を得て撮影を開始するようになった。実際に撮影が始まると、町衛生係、衛生協会の、保健所などが協力したという。

3. 自治活動をコアとしたカリキュラム

それでは、矢口新や岩波映画社の関係者に高く評価された水海道小学校の自治活動というのはどのようなものであったのか。これについては、すでに水海道小学校の自治活動を論じた越川の研究がある。そのため、以下ではその自治活動の要点を学校側資料から示した後、「はえのいない町」のモデルになった保健部の活動を当時の衛生状況とともに述べる。

(1) 水海道小学校の自治活動

茨城県内政部長松浦栄を発信者にして、GHQ より「新教育方針渗透状況二関スル件」が1946年1月28日に県下の高校に指令された。これを受けて茨城県立下館高等学校校長の鈴木春嶺が返信をしている。その返信内容を見ると、民主主義化のために生徒の自発的^{マツ}学修および生活の自治的訓練の強化を二大目標としている。自発的学修では自由研究と教科の自修がその内容であり、自治的訓練の強化では学校および学級自治会が挙げられている⁽²⁶⁾。事例は他校で見られた。例えば水海道第二高等学校では、教科学習以前の一切の教育活動を包含するものとして特別教育活動を捉え、ホームルーム活動や生徒会活動、クラブ活動などを時間割に位置づけた⁽²⁷⁾。この事例は高校であるが、茨城の教育界全体においても生徒の自治活動を促すこうした雰囲気が醸成されていたことは指摘できよう。

水海道小学校での実践の特色は、特別活動をコアの真中に置き、内容教科・道具教科を配置するものである。特別活動とは具体的には自治活動を用いた生活カリキュラムである。内容教科の授業に、視聴覚教材、特に映画や幻燈（スライド）教材を用いるものであるが、水海道小学校がどうして特別活動をコアに置くカリキュ

ラムを作成したのか。それについて、当時の水海道小学校の教頭であった金井は次のように述べる。「現代社会が要求する人間像は、現実の歴史的^{マツ}社会の生活者として、あらゆる地域社会の課題を解決し得る実践者である。換言すれば『地域社会の課題を解決し得る実践者である』」。このような「実践的生活人を育成するには、従来の知識体系を伝達する教育では不可能なのであって、実践的生活即ち社会の課題（問題か一筆者）を解決する生活を学校の中に於ても展開させることによって養われるのである」⁽²⁸⁾。

このように子どもの生活を担う自治活動を「実践的行動の層」とし、コアの周りには社会科や理科など社会の課題を作業単元で学ぶ内容学習としての「反省的思考の層」が配置された。さらに、その周りを国語や算数など、自治活動や内容学習をより高次なものするための系統的・鍛練的用具学習としての「習慣的行動の層」とした。これら三層構造はコア・カリキュラム連盟の系譜ではない、川口プランから続く地域教育計画論の実践であった⁽²⁹⁾。中心的な役割を果たす自治活動は、社会の機能と学校の実情にに応じて10の部で構成された。この部の基になったスコープは4つで、「通信」からは放送部・新聞部・揭示部、「健康」からは体育部・衛生部・給食部、「教養娯楽」からは教養部・視覚部、「保全」からは整備部、「消費」から子供銀行部が設けられた。「政治」のスコープは各部の活動や委員会活動で行ない、「生産消費」についても条件が整えば部を設けるとされた。自治活動の時間は、5・6年生4時間、4年生2時間、3年生以下1時間が時間割に組み入れられたが、それ以外の昼休みや放課後なども教師が児童とともに活動をした。こうした部の活動を通して、児童は社会の有機関係を体験し責任感を強く持ち、全体社会に対する自覚とリーダーシップを備える実践的性格を養うのである。

(2) 保健部の活動と当時の衛生状況

それでは、「はえのいない町」に描かれた保健部は具体的にどのような活動をしていたのか。水海道小学校の保健部は5・6年生の児童45名で編成され、企画部の組織は部長副部長の下に

統計班、器具管理班、看護班(子供診療所)、消毒班、検査班、普及宣伝班の6班がある。統計班は学校の衛生に関する統計を取り、1500人の生徒家庭を調査し流感の感染経路を明らかにした。また、看護班は診察券を発行し子供診療所を開設した。水海道小学校の記録では、「始業前、お昼休、放課後診療所を開き、けが人の手当、頭髮の手入などをする。特に冬期はしもやけ、ひび、あかぎれ等の集団手当をする。診療時間午前八時より午後五時まで」と写真とともに手書きで書かれている⁽³⁰⁾。また、本校保健教育の努力点として保健部の活動が「自主的」であるということ、1600人の全児童に良い健康生活の習慣をつけること、衛生的なセンスを養うことに努力するとしている。具体的には、(a)結核予防対策、(b)トラホームの撲滅、(c)回虫駆除、(d)保健週間の建設、(e)社会科・理解(理科か一筆者)・職家等における保健教材の重視、(f)保健教育計画の実践の6点である⁽³¹⁾。

水海道小の自治活動が「実践的行動の層」ととらえていたように、このような伝染病の駆除や衛生管理活動は当時の日本社会および茨城県の深刻な状況を敏感に反映した活動であった。現存しているもので最も古い1956年版『厚生白書』では、敗戦前後では発疹チフスや痘そう、コレラなど急性伝染病がかなり流行したものの、1955年現在では赤痢(疫痢を含む)、ジフテリア、日本脳炎、しょう紅熱が多発しているとする。はえが媒介となる赤痢患者は1950年ごろに再び増加し、それ以降毎年約10万前後の患者数が発生している。幸い新薬が発見され、赤痢の致死率は激減しているものの、疫痢は効果的な薬品がないために死亡率も高く、多数の児童が死亡している現状があるとする。こうした状況の背景に、衛生知識が不十分であるために予防が徹底しない点、消化器系伝染病の発生源である糞尿の衛生的な処理が十分に行われていないこと、予防接種の実施率が必ずしも高いと言えないことなどが指摘されている。ちなみに、1955年の伝染病統計によると、最も患者数が多いのが赤痢80,654人であり、死亡者数は6,042人で死亡率6.7%と他の伝染病と比較しても群を抜いている

⁽³²⁾。また、『厚生白書』の環境衛生の個所では「蚊とはえの駆除」が取り上げられている。それによると、「蚊は日本脳炎、マラリア等、はえは、赤痢、腸チフス等の危険な伝染病」を人に移すだけでなく生活と生産に悪影響を及ぼしているし、「蚊とはえの駆除」は1950年以降は各県にモデル地区が設けられ、1952年からは地域社会の組織活動が推進されてきたという。これにより、モデル地区では蚊とはえがほとんどいなくなり、地域の清掃の徹底、赤痢その他の伝染病及び乳幼児の下痢腸炎の著しい減少などが見られたとする⁽³³⁾。

こうした戦後の状況を受けて、茨城県内務部長から1946年8月12日付けで「公衆衛生教育に関する件」が出された。各種伝染病が県下にも蔓延している原因として「公衆衛生に関する知識並びに公德心欠如」が最も大きいとしている。そのため、ポイナー軍医中尉の命令により衛生思想の普及徹底に格別の尽力をするため各学校が具体的計画案を教育課長まで8月28日必着で報告するというものである。その内容は、①国民学校、青年学校、中等学校、各種学校共毎週1～2時間公衆衛生に対する教育を行うこと、②父兄を集め衛生教育を行うこととされている。①については、各学年で教授並びに実践指導をすとし、体錬科、生物科、家事科、家庭科その他教科と密接に連絡して最も時宜に適した教材を選択するという。授業は学級担任や衛生主任、学校医、学校職員などが行ない、伝染病予防については前回の通牒を再検討し強化することが述べられている。②については、父母会・母親学級・同窓会などで必ず公衆衛生に関する事項を加えて学校医等に講話をお願いすること、児童生徒を通じて印刷物ポスター等により衛生思想の普及実践を強調すること、保健所や市町村、衛生係、町内会や部落会などと連絡し指導強化を図ることとされている⁽³⁴⁾。これらのことから、この1946年の時点ではまだ教科として学習指導要領に位置付けられていなかった社会科への言及がないこと、学校や児童が率先して父母を中心に地域への啓蒙を行うこと、学校と地域との連携を図ることが重要視されてい

たことを指摘できよう。なお、この通牒は即刻計画し、休暇中でも招集日を利用して実施すること、進駐軍の司令であるために報告期限より遅れると処分される旨も記されているため、8月27日には水戸市三ノ丸国民学校長渡辺秀より報告がなされている。こうした社会状況や茨城教育の動きに対応する形で、水海道小では自治活動で保健衛生の内容が定められたのであろう。こうした動きは全国で見られ、当時の教育雑誌でもはえ退治を題材に公衆衛生に関する授業実践が行なわれていた³⁵⁾。

加えて、こうした保健衛生の内容を積極的に視聴覚教材で教えようとする動きがあった。1954年『健康教室』第45集では「特集・視聴覚教育のために」という題目で、壁新聞や校内放送利用の仕方だけでなく、原稿や放送劇や人形劇、紙芝居の脚本、童話などを保健衛生の内容で用いる具体的な教材が紹介された。また、県南に位置する土浦小学校でも学友会(児童会)活

動の一環として、保健衛生の授業で紙芝居や幻灯を用いたことが紹介されている³⁶⁾。注目すべきは、こうした教育雑誌での実践報告は1950年に公開された「はえのいない町」の後であるということであろう。学校や地域の蠅退治に挑む教材映画は、当時の日本社会の切実な現実を背景にした、解決の急がれる重要な問題であったのである。

4. 「はえのいない町」を用いた社会科授業の展開

それでは、実際に水海道小学校の社会科授業で「はえのいない町」はどのように教えられたのであろうか。1953年に水海道小学校が作成した社会科カリキュラムは、表1の通りであった。

表1の内容を見ると、スコープは学習指導要領の内容に従って作成されており、多くの単元が15時間から20時間という時間をかけて学ぶことがわかる。また、単元名が一般的な名称で書かれてある中で、交通・通信の6学年では「常

表1 水海道小学校の社会科カリキュラム

学年	生産	消費	分配・流通	交通・通信	健康	保全	政治	教養娯楽
1	おひゃくしょうさん(23)		おみせ(20)	のりもの(22)	せいけつな学校(15) おいしゃさん(18)	夜まわり(12) 踏切番(14)	世話をしてくれる人(18)	楽しい家(不明)
2	町の工場(26)	井戸と水道(30)	お金(24)	ゆうびん(20)	丈夫な身体(22)	おまわりさん(20) 学校の道具(18)	私達の学校(20)	美しい学校(18)
3	農家の仕事(不明)	お母さんの仕事(20)	町の商店(25) 私達の生活と商店(25)	町の道路(25) 学校新聞と校内放送(不明)	清潔な町(20)	火の用心(20)	学級会(20)	学校図書館(15)
4	工業製品(30)			自動車交通(20)	健康な生活(20)	警察署(20)	いろいろなきまり(15)	いろいろなクラブ(15)
5	農業生産の振興(25)	住生活の改善(25)	小売店と問屋(20)	報道機関の拡充(25)	町の健康施設(20)	風水害の防止(25)	学校委員会(25)	レクリエーション(25)
6	工業生産の振興(25)	生活改善(25)	近代生活と商業(25)	常磐線の輸送力と拡充(20)	伝染病の予防(20)	社会福祉事業(15) 青少年問題(15)	民主政治(25)	教養と文化政治(不明)

【出典】水海道小学校『地域の課題に基づく社会学習の展開』1953年より筆者作成。

磐線の輸送力と拡充」という内容があり、鉄道を事例に地域を学ぶことが目に付く。保健衛生の内容については、1948年『小学校社会科学習指導要領補説』においては1・2年生と5・6年生に配置されていたが、水海道小ではすべての学年に配置された上に「健康」という名称になっている。

それでは、具体的に「はえのいない町」を用いてどのような社会科授業が考えられていたか、1953年1月に水海道小学校で作成された『地域の課題に基く社会学習の展開』の社会科単元の1学年「せいけつな学校」15時間扱いの記述を検討する⁽³⁷⁾。本単元の学習問題は、「家や学校を清潔にするためにはどんなことをしているか」であり、目標は、「私達が健康な生活を営むためには生活環境が清潔に保たなければならない。その為には家でも学校でも毎日大きな努力をはらっている。私達はこの努力に感謝すると共に出来るだけよごさないように努め又私達で出来ることは協力しなければならないという事を考えさせる」というものであった。以下、表2はその具体的な授業内容である。

授業の展開は、(a)家や学校のどこが汚いか→(b)どのような影響を及ぼしているか→(c)清潔にするための工夫はどのようなものか→(d)自分たちは何をするかの4つの内容で構成される。(a)では、便所やごみ場所など家や学校での不潔な場面の教材を見てどこが一番かを話し合った後に実際に不潔な場所に見学に行く活動である。(b)は、そうした不潔な場所の悪影響を考えるとところである。はえが病原菌を運ぶことを絵図で学び、不潔と伝染病の因果関係を知る。また、伝染病が恐ろしいことを幻燈(スライド)教材で学ぶ。(c)は、そうした不潔な場所への対応である。便やごみなど不潔なものが綺麗に処理されない理由を話し合い、「はえのいない町」の保健部の児童が学校内外の衛生状況をよくするための活動に骨を折っている内容を視聴する。その後、自分の町を中心に不潔な場所への対処法を考える。(d)は、自分たちが出来ることを考えるところである。まずは個々人が清潔の習慣を身に付けるために何をすべきかを話し合い表を作

成する。また、町の人たちについても再度「はえのいない町」での寄生虫駆除の駆除や下水や便所の消毒など衛生状況の改善に協力する人々の姿を見る。

以上が「はえのいない町」を用いた単元の内容である。この流れについて、次の点を指摘できる。1点目は、自分の学校で撮られた教材映画であるが、「はえのいない町」を見た後の映画に対する扱いを見ると、他の学校でも使える様にこの単元の流れが一般化されているということである。2点目は、身近なところから地域を巻き込み自分たちが出来ることを考えるという流れから、1年生にしてすでに学校というスケールを超えて地域の中で自分たちの活動を位置付けるということである。学校だけが綺麗になっても問題が解決するのではないこと、地域全体の中で衛生のことを考える必要であることをよく示している。また、教材映画「はえのいない町」に関しては、次の2点を指摘できる。1点目は、この教材映画全体は12分ほどであるが、映像のすべてを児童に見せるわけでないということである。2点目は、この「はえのいない町」教材を2回に分けて授業で用いるだけでなく、他の幻燈(スライド)教材と併用していることである。この水海道小学校での「はえのいない町」教材の社会科授業での使い方について、筆者が以前言及した島田鐵哉と比較すると次のことを指摘することができる。島田は伝染病予防の個所で、蠅退治の場面、保健所衛生班、町の人たちとの協力の3場面を視聴している。加えて、島田は「伝染病とのたたかい」という社会科教材映画大系の中にある教材映画の該当箇所を同時に見せて児童にその内容を比較させ、伝染病予防で自分たちが出来ることを考えさせている⁽³⁸⁾。もちろん、島田の実践はその内容から6学年で実践されたと考えられ、水海道小学での1年生の実践とは単純に比較できない。だが、水海道小学校の社会科授業も島田の授業も、教材映画をすべて通して児童に見せ、学習を行うというのではなかった。このように、当時の社会科授業での教材映画の役割として、授業の内容や進度、児童の状況に合わせて、教材映画の

表2 「健康」 スコープ 第一学年「せいけつな学校」15時間の流れ

問題	目標	学習活動	教材
家や学校では清潔にするためにどんな仕事をしているか			
家や学校ではどんな所がきたないか	不潔な場所は多種多様であること	家や学校で不潔になっている所を調べてみる 学校や家でどこが一番きたないか話合う 不潔な場所へいってみってくる	便所から汚物があふれていて不潔な様子 ゴミ捨て場にごみがたくさん捨ててあり処理に困難な様子 下水が完備されていないので道路に悪水が流れ出ている様子
不潔な場所であると私たちの生活にどういう悪影響があるか	衛生上からみて清潔にすることは必要なことであること 恐ろしい伝染病は不潔な場所がもとでひきおこすものであること	不潔な場所は私たちの生活にどういう影響があるかを調べてみる 不潔な場所は伝染病をつくるわけを表や図を見て話合う 幻燈をみる 幻燈をみて病気を引き起こす恐ろしいことを話し合ってみる	伝染病をはっきり示した絵図 寄生虫の絵と表 はえが病原菌を持運ぶことを示した絵図 幻燈 赤助の一生
家や学校のきたないものはどう処理されるか	きたないものを処理する施設の必要なこと	不潔な場所をどの様に処理しているかを調べてみる 不潔なものをどう処理してるかを見ってくる きれいに処理されないわけを考え話合ってみる <u>映画を見る</u> <u>映画を見て町で不潔な場所をどの様に処理しているかを話合う</u>	不潔なものが思う様に処理されないで困っている実態 便所がたまっても汲取人がきてくれない ごみがたまっていてそれを取払うのに困っている <u>映画 はえのいない町 保健部の人が学校内外の衛生に骨おっている実態</u>
私達はどの様に協力したらよいか	清潔についてよい習慣をつけることが必要であること	私達はどの様に協力したらよいかを考えてみる 各人がせいけつな習慣をどうつくっていったらよいかを話合う どう実行したらよいかそうだんする 表を作って記入する	毎食前に必ず手を洗う事を実施している様子 便所使用に特別注意しているが実行されないで不潔になる様子 よい子の一日のあり方を絵にあらわした図

	一般社会人がもっと衛生に協力することが必要であること	この町の人が衛生についてどのような協力をしてきているかを話合ってみる <u>映画を見る</u> <u>映画をみてこの町の人が衛生に努力してくれていることを話合う</u>	<u>映画「はえのいない町」</u> <u>一般人が衛生についての知識が非常に低い現実</u> <u>実</u> <u>町の衛生協会の人達が町の精製について常に心配してくれている様子</u> ・ <u>寄生虫駆除</u> ・ <u>下水や便所の消毒</u>
--	----------------------------	--	---

【出典】水海道小学校『地域の課題に基づく社会学習の展開』1953年より筆者作成。表の中の野線および下線は筆者。

場面を教師が選択し映像を視聴するというものであった。授業の必要に応じた場面映像を基に、児童が学習を深めていくという形で授業を進行したのである。これは自校で映画が撮影された水海道小学校においても、徹底されていたのである。

おわりに

以上、本研究は、学校所蔵の資料も用いながら水海道小学校での教材映画「はえのいない町」の制作の背景を明確にするとともに、制作された教材映画を用いての社会科授業の状況を明らかにした。水海道小学校のカリキュラムは、自治活動をコアとして実践的生活人を育てるものとされた。コアの周囲は社会と理科の作業単元、さらにその周囲は系統的学習で構成した。こうした水海道小学校のコアカリキュラムで見られた生徒の自主性や地域の協力状況は教育関係者のみならず映画関係者にも高く評価され、社会科教材映画大系の一つである「はえのいない町」が撮影される背景となった。また、水海道小学校は自校で撮影されたこの教材映画を、社会科の1学年「健康」スコープの授業で用いて、映画の全部を見せるのではなく授業内容に合わせて地域に関する映像の内容を選択し、2回に分けて児童の社会科学習に用いていた。自校の建物や施設、児童が出演していても、社会科授業においては映像を通してすべて使うことはなか

ったのである。社会科の学習内容に則して映画内容の必要な場面だけを授業で用いるという、教材としての映画の使い方を示すものであった。

それでは、こうした社会科教材映画を授業で用いるために必要な高価な機械や設備をどのように学校に整備していくのか。今後は、地域と行政を巻き込んで全国で組織化されていくフィルム・ライブラリーの実態を地域や水海道を中心として検討する必要がある。これに関しては先行研究でも指摘した村山英世の研究がある。しかし、水海道小学校をはじめ水海道地区が社会科を重視してきた経緯を考えると、筆者は社会科授業との関係でフィルム・ライブラリーの検討を行う必要性を感じている。

【謝辞】本論文を作成するに当たり、水海道小学校には学校資料の閲覧を許可していただきました。また、小学校記念誌作成の際の貴重な資料をお貸しいただいた名村栄治様にも深くお礼を申し上げます。

注

- (1) 金玟辰、篠崎正典、國分麻里「茨城県筑波第一小学校における1950年代の新教育実践—カリキュラムの構想と自学学習の特質—」『学校教育学研究紀要』2号、筑波大学人間総合科学研究科学校教育学専攻、2009。
- (2) 新井洋三郎「戦後における社会科教育—本県

- 小学校の場合―』『茨城県史研究』75, 1995。なお、水海道小学校は1947年より水海道町立であったが、1954年の市制発布により水海道市立となった。本稿はこのどちらの時期も扱うため、水海道小学校と表記する。
- (3) 國分麻里「初期社会科における教材映画の特色―『社会科教材映画体系』を手がかりにして―」『社会科研究』79, 2013, 12頁。
- (4) 藤瀬李彦「『はえのいない町』をつくった頃」：村山英世「二人の教育者と『常総コレクション』」：中村秀之「見えるものから見えないものへ―『社会科教材映画大系』と『はえのいない町』(1950年)の映像論―」丹羽美之・吉見俊哉編『戦後復興から高度成長へ 民主教育・東京オリンピック・原子力発電』記録映画アーカイブ2, 2014, 東京大学出版会, 17～98頁。
- (5) 越川求「戦後カリキュラム改革と自治活動の研究―1950年代茨城県水海道小の実践を中心に―」『立教大学教育学科研究年報』56, 2012。
- (6) 前崎博「水海道小学校の卒業生」「水海道小学校の沿革と卒業生」1990年。
- (7) 水海道小学校における猪瀬の活動については、1947年4月に赴任し、退職する1964年3月までのことを猪瀬自身が1988年2月28日付でまとめたものがあり、関係者の間では「猪瀬メモ」と呼ばれている。以下、1960年までの水海道小学校の活動記録に関しては、この「猪瀬メモ」と学校史を中心に引用する。また、資料として引用する時は「猪瀬メモ」と称し、その頁数を示す。
- (8) 「映画が教室でどう使われているか」『朝日新聞』1957年10月6日付。
- (9) 倉持正「海小が熱く燃えた時代―プログラム学習モデル校として―」『仰ぐみどりの―水海道小学校百三十年の軌跡―』水海道小学校記念誌刊行会、名村栄治発行人、2007年、488頁。
- (10) 「猪瀬メモ」2頁。
- (11) 水海道小学校「実験学校中間報告 生活教育研究発表会要項」, 1950年2月24日。
- (12) 倉持正前掲書, 499頁。
- (13) 水海道小学校『本校の保健活動』1955, 292頁。
- (14) 矢口新と社会科教材映画大系の関係については、國分麻里前掲書を参照のこと。
- (15) 村治夫「『蠅のいない町』をつくったところ」『友―Iwanami Hall』岩波ホール発行, 1975, 10頁。
- (16) 大上福次郎「教材映画『蠅のいない町』撮影の経緯」水海道小学校『本校の保健活動』1955, 22頁。
- (17) 同上。
- (18) 村治夫前掲書, 11頁。
- (19) 教材映画製作協同組合／関口敏雄・加納龍一・阿部慎一「教材映画はこうして作られている」『視聴覚教育』1952年1月, 34頁。
- (20) 草壁久四郎『映像をつくる人と企業―岩波映画の三十年』みずうみ書房, 1980, 25頁。
- (21) 大上福次郎前掲書, 22頁。以下、撮影の経緯についてはこの大上福次郎の文章を引用する。
- (22) 大上福次郎前掲書, 23頁。
- (23) 「映教ニュース」『映画教室』4巻2月, 49～50頁。
- (24) 大上福次郎前掲書, 23頁。
- (25) 大上福次郎前掲書, 24頁。
- (26) 茨城県史編集会「四十六 新教育方針滲透状況に関する件報告」『茨城県史料 戦後改革編』, 1992, 57頁。
- (27) 茨城県立水海道第二高等学校「本校における特別教育活動の実際」『実験学校研究紀要』第5集, 茨城県教育庁指導課編, 1956年。
- (28) 水海道小学校「本校における自治活動の理論と実際」『茨城県実験学校報告』1950。
- (29) 越川求前掲論文, 156頁。
- (30) 水海道市立水海道小学校『本校の保健活動』1955年, 10頁。
- (31) 同上, 18頁。
- (32) 「急性伝染病」『厚生白書』1956年版。
- (33) 「蚊とはえの駆除」『厚生白書』1956年版。
- (34) 茨城県史編集会「九九 公衆衛生教育に関する件」『茨城県史料 戦後改革編』, 1992, 100～101頁。
- (35) 例えば、千葉県館山市富崎小学校子供保健所「はえ退治を通しての子供保健所の活動」『健康教室』56集, 1955：高岡市立川原小学校保健主

事の本田久一「蠅なき町へー本校の蠅取り運動
実践記録より」『健康教室』36集，1953などが挙
げられる。

(36) 土浦小学校「健康教育に視聴覚教材をこう利
用している」『健康教室』54集，1955，40～43
頁。

(37) 水海道小学校『地域の課題に基く社会学習の
展開』1953，20～23頁。

(38) 國分麻里前掲論文，7～10頁。

New Education at Mitsukaido Elementary School in Ibaraki after World War II: Production of *A Town without Flies* and Social Studies Lesson Practices

Mari KOKUBU

The aim of paper was to discuss what role educational films for social studies played in lesson practices, as New Education after World War II. In this paper, I explained the production process of *A Town without Flies*, an educational film for social studies, and clarified the state of lesson practices using the film at Mitsukaido Elementary School. New Education was actively carried out in Ibaraki, under the support of the Prefectural Board of Education. Mitsukaido Elementary School was designated as an educational research and experimental school in 1948, and became widely known in the 1950s for its curriculum and audiovisual education. As for the school's curriculum, core courses included activities which were promoted by the student council, and sub courses included tool subjects and content subjects. Lessons using educational films were developed for content subjects such as science and social studies. *A Town without Flies* filmed by Mitsukaido Elementary School shows the situation at that time. The autonomy of students and the cooperation of the local community during activities by the student council were highly valued. Some activities by the student council became content for the educational film. In addition, the film was used two times in social studies lessons for health units. This means *A Town without Flies* was not only a documentary film of school life but also a teaching material for social studies.